

勢田川調小留書（9）

伊勢・船江の探訪（3）
（宇治・山田と伊勢北辺を繋ぐ陸路の要衝か）

平成26年5月作成
大屋行正

船江の探訪（3）

（宇治・山田と伊勢北辺を繋ぐ陸路の要衝か）

まえがき

我が船江の集落は勢田川に面した港町河崎に付随する町と言う位置付けである。

前稿で学習したとおり、船江字甘露地（現在の一丁目）からは、縄文晩期頃から平安時代にまたがる集落が存在したことを窺わせる遺物・遺構が僅かな数であるが発見されている。つまり縄文海退の途中で陸化し、平安海進の後期迄続いた。

中世、鎌倉時代に入ってから、再び宮川の氾濫による造地活動が活発に行われ、船江以北の三角地の成長も盛んに進んだ。従って船江以北の地の歴史は中世からということがいえる。

私は船江が河崎に付随した町と言うことでなく、北辺の大湊・神社（かみやしろ）と宇治・山田を繋ぐ街道の役割を果たすとともに、当時の都（平城・平安）との繋がりをも持ち、夫々の時代の変化の中に、賑わいを秘めていたのではないかと想定して学習を始めることとする。

先ずは、この船江の街道を利用した可能性のある歴史事象を整理してみる。

何故船江を陸路の要衝と推理したか

船江を通る道路の今昔

最初の道

古代からの人の営みが道として後世に残る。今は消えた道もある。現在の道造りと言えばブルドーザーなどの建設機材を連想するが、道の始まりは人の歩いた跡が一条の筋となり地が固まって細い小道となったものであるといわれている。

船江地内甘露地（船江一丁目）に縄文時代から平安時代にかけての古い集落が存在した痕跡がある。現在の伊勢日赤病院から船江上社に至る当時の集落としては広大な地域である。（勢田川調小留書（8）船江の探訪（2））

縄文時代から弥生時代にかけての大きな海退の結果、縄文時代の後期から陸化した甘露地に自然堤防が出現し、晩期にかけて伊勢市南部の段丘上の集落から人々は、肥沃で自然灌漑に優れたこの地に移住を始めたと推定できる。従ってこの時代に宮川の中流域に点在する集落から道を開きながらこの新しい土地に移動してきた。

古代の人々は当時伊勢湾に接する甘露地集落から魚介類などの海産物を背負って丘陵

集落との交易を行ったのではないだろうか。点在する集落を繋ぎながら道が生まれ、往来も頻繁になっていった。又、甘露地集落の中にも原生林を切り開いて狩猟の道、木の実や野草を求めて出来た道、一族の家を繋ぐ道など身近に出来て行ったと思われる。

然しその道は弥生時代に始まる海進によって水没し、甘露地集落の水没と共にそれらの道も平安時代後期に消えた。中世に再び陸化するが古代に築かれた遺産はすべて埋没してしまった。勿論古道も消えた。

以上のように、集落に居住する古代人が生活を営む上に自然に出来た道とは別に、古代から中世にかけて、後世に残る様々な歴史の中で繰り返し広げられた出来ごとの舞台となった道もある。次項に船江が舞台の一翼をかっと思われる事項を纏めて見る。

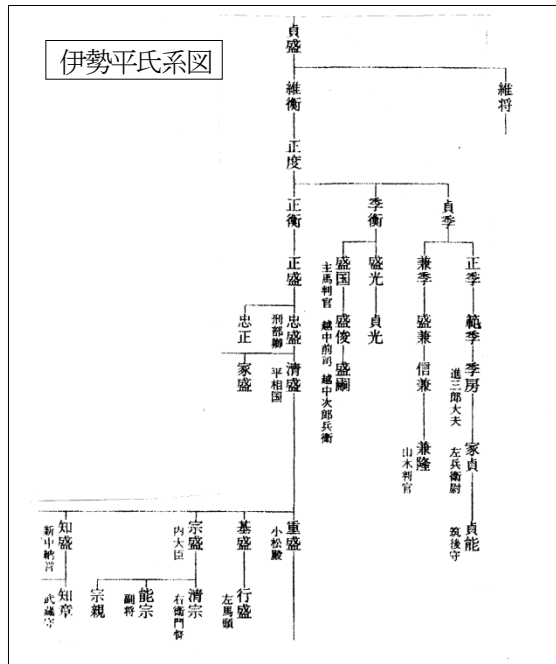
参考資料 伊勢・船江探訪（2）附録（古代甘露地集落の仮想原風景） 大屋行正 勢田川調小留書（8）・（9）

船江と平家

船江と平家に就いては二つの伝承がある。平信兼の船江合戦は以前から知る所であったが、伊勢市矢持町の平知盛の矢持落ちの伝承は最近本稿を書くに当たって知った。全くの不覚であった。

清盛から5代遡る維衡から伊勢平家と言われるようになった。伊勢の中北部、「神郡」と言われる伊勢神宮領の、度会・多気・飯野・員弁・三重・安濃の六郡を支配し、このうちのいずれかに初代伊勢平家の維衡は在住していたという。察するに我が船江もその支配下にあったものと思われる。

ということは船江(甘露地集落)と近隣集落には、勿論北勢・中勢更に都へと繋がる街道が存在した可能性がある。



船江の合戦

この船江の合戦については、『吾妻鏡』の治承5（1181）年正月21日の条に次の様な記述がある。

「廿一日戌辰。熊野山悪僧等。去五日以後乱人伊勢志摩両國。合戦及度々。至于十

九日。浦七箇所皆悉追捕民屋。平家々人為彼（悪僧等 脱落か）或捨要害之地逃亡。或伏誅又被疵之間。弥乘勝。今日焼拂二見浦人家。攻到四（旧 誤字か不明）瀬（田 脱字か）河（私の注 勢田川のことか）邊之處。平氏一族關出羽守信兼相具姪（姪か 私の注 蔑視の意か）伊藤次已下軍兵。相逢于船江邊防戦。悪僧張本戒光（字名大頭八郎房）中信兼之箭。仍衆徒引退于二見浦。擲取下女（齡三四十者）并少童（十四五者）等。以上三十余人令同船。指熊野浦解纜云々。尋此濫觴。南海道者。當時平相國禪門虜掠之地也。而彼山依奉祈関東繁榮。為亡平氏方人。有此企。云々。相國禪門驕奢之餘。蔑如朝政。忽緒神威。破滅佛法。惱乱人庶。近則放人使者於伊勢国神三郡（大神宮御鎮座）充課兵糧米追捕民姻。天照太神鎮坐以降千百餘歲。未有如此例云々。凡此兩三年。彼禪門及子葉孫枝可敗北之由。都鄙貴賤之間。皆蒙夢想。其旨趣雖区分。其料簡之所覃。只件氏族事也

此の合戦の前年、治承4（1180）年に源頼朝が挙兵し、富士川の戦いで平家が敗れたことに始まり、榮華を極めた平家が、俱利伽羅峠の戦い、一谷の戦い、屋島の戦いに連敗して、平家は文治元（1185）年に壇ノ浦で滅亡することになる。

この頃、熊野の衆徒がしばしば志摩・宇治・山田に乱入していた。平家の勢力の強かった伊勢・志摩地方にも反平家の勢力による治安の乱れが勃発した。

『吾妻鏡』の治承5（1181）年正月5日の条に「関東の武士団（源氏の武士団）が太平洋を渡って京都（当時平家が統治）へ攻め込んで来るという風聞が流れた。平家は家人などを志摩国の浦々に配置し警護したとの記述がある。

同年1月5日に熊野山の反平家の宗徒等が波切を襲った。更に1月19日、熊野の衆徒が伊雑宮に乱入し、神殿を破壊する乱行を行ったうえ、1月26日山田・宇治両郷に襲来し民家を焼き、財産を奪い取った。

この熊野の衆徒の乱行の中、1月19日の分の記述に、本項の冒頭の吾妻鏡の記述があり、我が船江が登場する。

熊野の衆徒は更に志摩一帯の民家を襲い、伊勢平氏の家人は守りを捨てて逃亡した。勝ちに乗じた衆徒は、二見が浦の人家を焼き払い攻め上り、船江の辺りで、平家一族の関出羽守信兼の一隊と遭遇し、悪僧の張本人戒光が信兼の矢に当り戦死した。主を失った衆徒は二見に逃げ帰り、下女・小童を捕まえて船に乗せ熊野へ逃げ帰った。つまりこの騒動の結末は信兼によって船江で鎮圧された。

この騒動の発端は治承4（1180）年に源頼朝が鎌倉で兵を挙げ、富士川の合戦など徐々に平家が衰退する中で、平清盛の驕奢・横暴に民衆の平家に対する反感が高まったことである。

元暦2（1185）年、壇ノ浦の合戦で平家は滅亡し、平家に代わって源氏の時代となり鎌倉時代の幕開けとなる。

さてこの時代に於ける我が船江周辺の地勢はどのような状態であったかを推測して見る。

私の学習記録『勢田川調小留書（8）』によれば、この頃は平安海進の海水準変動の最高潮位の時期に当り、宮川、勢田川、五十鈴川等から流出される土砂による造地活動が盛んで、檜尻川以北の三角州が現在の大湊地区を目指して成長中であつた。隣町の小

木町に古城と言う大字があるが、平安後期に造成された新開地であり、前出の熊野衆徒を敗走させた平家一族の関出羽守信兼の支配する砦があったのではないか。多分この近辺が、小舟の発着する伊勢湾に面する船着場であったと思われる。

平安末期から鎌倉初期にかけて、この地は伊勢湾に面して山田の海の玄関口であった。源平合戦で壇ノ浦で敗北した平家の総大将平知盛が壇ノ浦から落ち延び、現在の伊勢市の矢持町に蟄居した際、南海を回り我が船江の地に上がったという伝承があることからも頷ける。

伊勢市の「平家むら」の伝承

この伝承については、『伊勢郷土史草 第39号』（三重郷土会）に間宮忠夫氏が「伊勢市の平家むら」と題して詳しく述べられているので詳細はそちらに譲る。

平知盛の弟平清邦の子孫が伝える『一人口伝』「壇ノ浦脱出」で次の様な伝承が記述されている。概略を記す。

1. 口伝者平清邦（知盛の弟）は壇ノ浦の戦いで海に飛び込み意識を失ったが味方に助けられ生き残った。
平家物語では、平知盛は一族の最後を見届けて入水したとあるが、別伝で平維盛の甥藤原景清によって海中から救助されたという説があり、知盛は誰かによって救助された。
2. 生き残った一族(男女十人程)は密かにすぐ後方の彦島に集まった。安德帝、二位尼、知盛、清邦、妹、知盛の叔父（教盛か）その他従者。
3. 合戦の行われた元暦2（1185）年3月24日の夜、夜陰に紛れて3艘の船で東への潮流に乗り、翌朝明け方未だ暗いうちに播磨に上陸した。
4. 上陸後一休みしたのち、内陸へ逃れた一行は、やっと丹波山中に達した。源氏の追撃を恐れ、安德天皇は従者と共に北方に逃れ、知盛は伊勢へ向かい、清邦は能登へ転進し「かどや 角谷」と名乗った。「一人口伝」では伊勢の知盛が名乗ったという「かくたに」は存在しない。
5. 知盛は一時期、伊勢から全国に残る平家一門に平家再興の指令を出していたが、源氏の追及が激しく、挙兵に至らず断念した。
6. 知盛の他界は建仁3（1203）年3月17日（旧暦） 52歳。蟄居先の伊勢市矢持町久昌寺（右下図はその山号）の近くに墓がある。

上記は『一人口伝』の概要の抜粋である。これに係わる伝承には色々な異説もあるが、私は間宮氏の見解に従い知盛は壇ノ浦から誰かの手により脱出して、伊勢の矢持町に蟄居しこの地で他界したという説をとることにする。

上記の話が何故船江に関係あるのか。間宮氏の書かれ



た『伊勢市の平家むら』に森田利吉氏の『三重の文化4』（三重県郷土会）に投稿された「久昌寺臨時見学記」として紹介された『中津家由緒書』の中に次の記述がある。

平知盛西国壇之浦没落之節、舟ニ而南海ニ廻り伊勢神領山田之内舟江村ニ上り、山田前山ニ引込ミ四年居住仕候所ニ、世間不審仕候様申ニ付、又山奥覆盆子谷（いちこたに）ニ引越居住仕候。

つまり、知盛は丹波から南下して多分、神戸辺りから船で紀伊半島を廻り、当時山田の海の玄関口であった船江に上がり、外宮長官横地光忠の助力により、前山を経て矢持へ蟄居することとなった。私の推定では上陸地点は前項の「船江の合戦」に記した檜尻橋の北から大字古城辺りであろう。

尚、中津家略系図によると、知盛の子二代武盛の俗称は前山八郎兵衛、三代友則は覆盆子谷八兵衛、四代維弘から六代知次までは黒田、七代知定から十代知員迄は山岡、十一代知時以降中津と名乗ったという、家系図も異説がありよく分からない。又、『一人口伝』の伝承者角谷隆平氏は知盛の子孫ではなく清邦の子孫と伝えられている。

この話には色々な異説があるが、これが今回の学習の主目的ではないので、これ以上の追及は差し控える。

以上二つの伝承から伺うに、船江地区の人家の様子が記述されていないことから、平安末期から鎌倉初期にかけて人家は殆ど存在しなかったと思われるが、山田の海の玄関口から町の中心部へ繋ぐ「道」は存在したと思われる。

参考資料 吾妻鏡第一 新訂・増補 国史大系 吉川弘文館
伊勢・船江の探訪（2） 勢田川調小留書（8） 大屋行正
伊勢市の平家むら 伊勢郷土史草 39号 間宮忠夫 三重県郷土会

大塩屋御蔭と船江

平安末期から鎌倉初期の船江が、かつて栄えた「甘露地集落」の水没後、河口部の氾濫原は大湊を目指して三角州が成長した。

中世、伊勢湾の海水が、遡上する宮川の下流の右岸域、即ち御蔭町の長屋から馬瀬町、御蔭村新開辺り、更に大湊の海岸線にかけて開けた「塩の荘園」が、御園塩屋、大塩屋御蔭であった。我が船江の北隣地から、中世以降新しく造地されたと思われる三角州一帯である。

源平壇ノ浦の合戦から100年後の正応2（1289）年に発行された高向郷長屋御厨内塩屋御蔭の塩浜沽券がある。これからこの塩屋御蔭の起源を割り出すことは出来ないが、これ以前に遡ることは出来よう。そしてこの塩屋は神宮の大切な御塩を調達していたという記述が伊勢市史（中世編）に『大湊領元田由来記』（享和4（1804）年成立）から次の様に引用されている。

明応七(1498)年戊午八月廿五日、大地震高浪来り、其上宮川の上山ぬけにて大水一度に押来り、塩屋村家員百八十軒余、内御塩取役人百軒余、何れも補任頂戴の者共にて内宮権禰宜荒木田姓ニ御座候、一時に大海へ押流、塩浜・田畑も一面の荒野と成し事、(中略)東の方中沢辺に居住の者漸く四五人命介り、大切なる御塩調進の義絶ん事を相嘆き候へ共力に不及、其上乱世の最中にて誰取上る人も無く候故、無是非大湊へ引越申候、御塩の儀は其後二見より奉権進候。(以下略)

この『由来記』によると塩屋御園の塩浜は、内宮権禰宜荒木田一族によって内宮への御塩調進が、明応の大地震の津波により宮川右岸域の塩田がほぼ壊滅するまで行われていたことになる。

一方、『角川日本地名大辞典(旧地名編)JLogs版』の「塩屋御園(中世)」「大塩屋御園(中世)」を読み合わせると、隣り合った御園として発展したらしい。その線引きは難しいが、塩屋御園は御園町長屋の一部、新開、下野町、大湊町の一部を指し、大塩屋御園はそれより以西の御園町、大湊町の一部を指すらしい。特に長屋地区、大湊地区の線引きは私には分からないが、この境界は時々で変化があったと思われる。右上に大凡の線引きをしてみたが両御園の境界線ははっきりしない。



1. 塩屋御園

初見は建久2(1202)年(鎌倉初期)の『大神宮神主請文』に「度会郡空閑塩屋・江葦原地式処」という記述であり、領家は度会氏である。その場所は特定出来ないが、『伊勢市史(中世編)』の「御園すしおけ推定図」をみると、大湊の志宝屋神社の西方宮川の河口部の地形とよく似ている。『請文』にある「空閑(くが)塩屋」は冠水しない塩浜を指し、「江葦原地」とは志宝屋神社の南の旧江川(現在の大湊川)の河道湿地を指しているのではないかと推定される。『濱七郷』第2号によると、すし桶地区は明応地震で壊滅的な被害を受ける前は現在の太湊川が宮川の本流で、大湊から樫原新田迄は陸続きで、其処に大塩屋御園があったと記されている。然し、塩屋と大塩屋の線引きは時代と共に変化があり定かには分かりにくい。

逆な言い方をすれば、この地の領家が外宮権禰宜度会神主と推定される、鎌倉期から吉野朝(南北朝)期にかけて塩屋御園といわれ、大湊から高向郷長屋に至る地域の塩屋で外宮へ塩の献納が行われていたといえる。

2. 大塩屋御園

初見は延文4(1359)年(吉野朝時代)の『尼門阿畠地議状』の中に「高向郷大塩屋御園内中沢」とある。中沢・鮫桶は塩屋御園の小地名としても見えるのでこの辺りの線引きは難しい。初見からみて大塩屋御園は塩屋御園より後発であり年

代により区割りが変わったのかも知れない。この御園の領家は内宮権禰宜荒木田氏であり、南北朝時代から戦国期にかけて内宮に塩を献納してきた。つまり、南北朝を経て、皇統が南朝から北朝に統一され、室町時代が始まったのは西暦1393年のことである。塩屋御園の領主もこの時期から徐々に南朝系の度会氏から荒木田氏へと交代していったのではないか。

室町期に入った大塩屋御園の製塩業は12世紀末から15世紀初頭の200年余りの間に自然浜、揚濱、入浜へと急速に発展した。鮭桶御園の推定図には入浜式の濱溝が画かれている。吉野朝時代、明德3(1392)年には大湊から関東品川へ塩が運ばれていたという。

然し、明応の大地震・津波とその直後の大風・洪水(明応7年,1498年)による宮川の流域変更があり塩田地を失い、この御園の製塩業は壊滅し、両宮への塩の献納も二見にその座を譲ることとなった。

私がここでテーマとして取り上げたいのは、二見から神宮への御塩道の伝承は残っているが、塩屋・大塩屋御園から両宮へ塩を献納するための道、即ち御塩道の伝承がない。船江の地を通ったことは事実だと思うが何処を通っていたかを知るためである。これについては項を改める。

- 参考資料 伊勢市史(中世編) 伊勢市市史編纂室
 角川日本地名大辞典(旧地名編) JLogos版
 濱七郷 第2号 町絵図に見る昔の大湊 三木民郎 勢田川惣印水門会

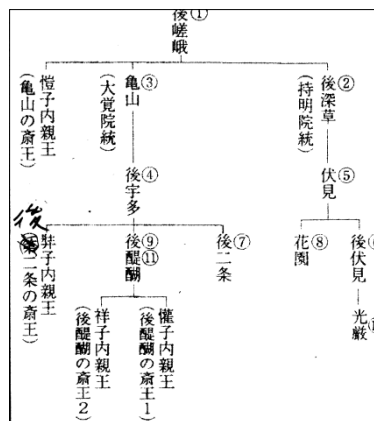
北畠親房と船江

南北朝の分裂 鎌倉時代半ばの寛元4年(1246年)、後嵯峨天皇の退位後に皇室は皇位継承を巡って大覚寺統と持明院統に分裂してしまった。つまり、院政を敷いた後嵯峨上皇が、後深草上皇(寺明院統初代)の弟、龜山天皇

(大覚寺統初代)の子孫が皇位を継承するよう遺言して崩御したために、後深草上皇と龜山天皇の間で対立が起った。

そこで鎌倉幕府の仲介によって、大覚寺統と持明院統が交互に、ほぼ十年を目途に皇位を継承する事(両統迭立)が取り決められていた。鎌倉幕府により、両者の子孫の間ではほぼ十年をめどに交互に皇位を継承(両統迭立)し、院政を行うよう裁定された。

然し、後醍醐天皇(大覚寺統)の建武の親政によりこの慣例が崩れ、後村上天皇、長慶天皇、後龜山天皇と大覚寺統(南朝)の天皇が続いた。これに対抗し



た足利尊氏が持明院統（北朝）の光明天皇を擁立し後醍醐天皇を廃した。吉野に逃れた後醍醐天皇は自己の正当性を主張して、朝廷は分裂し南北朝時代となる。

その後、後亀山天皇元中9年、後小松天皇明德3年（1336年）明德の和約によって皇統は寺明院統（北朝）に統一され現在の皇室へと続くことになった。

南北朝の分裂に係わった人物には、有名な足利尊氏、新田義貞、楠木正成などお馴染みの武将がいる。それは本稿のテーマではない。

我が船江に係わりがあるのではないかと、この項で取り上げている北畠親房もこの頃に後醍醐天皇に尽くした人物である。

南朝と伊勢神宮 鎌倉後期に伊勢神道を成立させた外宮の神官たちが、その教説を亀山・後宇田・後醍醐の各天皇（大覚寺統）に積極的に布教し、親近感を抱いていた。又大覚寺統の院や天皇も神宮に対する尊崇の念も強く、未婚の皇女が伊勢神宮に奉仕する伊勢斎王の制度が大覚寺統の天皇の代にのみ行われていた。

北畠親房が大覚寺統の重臣であることから、外宮神官取分け度会家行らの支持を受けて南朝再興の拠点として伊勢の地を選び、一之瀬と田丸を拠点とした。

後醍醐天皇延元3年・光明天皇暦応元年（1338）年に親房の嫡男顕家が戦死した後、親房は伊勢国において外宮禰宜度会家行の協力を得て南朝勢力の拡大を図る。ここで親房は家行の神国思想に深く影響を受けることになった。

親房と光明寺僧侶恵観 伊勢に下向した親房は、伊勢吹上にあつた光明寺（現在は岩淵にある）の恵観という僧侶と親交があつた。恵観は自ら船に乗り伊勢湾内の北朝方に対して撓乱攻撃を仕掛け南朝方に協力したという。関東・東北と吉野を結ぶ中継の拠点として吹上一大湊を通して行われた。我が船江はこの経由地となつたとみてよい。

大湊から陸奥へ出帆 嫡男顕家を失つた親房は自らが東国に下り、関東・東北の南朝軍を再建しようとした。

後醍醐天皇延元3年、光明天皇暦応元年（1338）9月、親房は後醍醐天皇の皇子義良（のりよし）親王（後の後村上天皇）を奉じて東国へ下るため、軍勢を伊勢大湊に集結した。『太平記』に

陸地ハ皆敵強シテ通りガタシトテ、此勢皆伊勢ノ大湊ニ集テ、船ヲソロヘ風ヲ待ケルニ、九月十二日ノ宵ヨリ、風ヤミ雲収テ、海上殊ニ静リタリケレバ、舟人纜ヲトイテ、万里ノ雲ニ帆ヲ飛ス。

とある。軍勢の数には諸説があるが、全てが出帆するのに1カ月近くを要していることから、三百から五百艘余りの大船団（これ程の大勢力では無かつたのではないかと）であり、この出陣は南朝方にとって乾坤一擲の大勝負であつたと言われている。然しこの大船団も房総半島沖の近くで、暴風雨と遭遇し、伊豆の沖まで吹き戻され多くの船は行方不明とな

ってしまい、関東周辺にも漂着した。

義良親王の乗船した船は奇跡的にも伊勢国篠島（現在は愛知県）に吹き戻され、吉野に帰った後、後醍醐天皇の崩御の後南朝方の天皇として即位した。以上は伊勢市史（中世編）の要約である。

この詳細は本稿の主題ではなく、ここで取り上げたいのはこの大量の船を何処で建造したか、とりわけこの大量の兵士をどの様にして、どの道を通して大湊へ集結させたかということである。

参考資料 Wikipedia

伊勢市史（中世編）伊勢市市史編纂室

船江を通る道物語

船江を貫流する往古の河川

船江を縦貫する道路を考える前に、当町を貫流する往古の河川について調べて見る。



『宇治山田市史』（山田史 地勢）に次の様に記述されている。

「古昔の地勢を案ずるに、当地南部一帯は鬱蒼たる連山で、麓より北に開けて一望の高谷をなし廣野を成し、宮川の支流が数派となって其の間を流れ、其の一つは今の宮川町の北方にある綿屋殿（わたやご）という所より分れて高向郷を貫き船江町の北を過ぎ黒瀬町字二軒茶屋の北にて勢田川に入つ

ている。之を北宮川という。甫蔵主川・檜尻川はその残蹟で、又大世古町の北方にある字地に北宮川という所もある。其の二は中島町の小太郎池の所を出口として四派に分流している。一つは現在中島町を横断して北東に向かひ、小柳川となり檜尻川に合流する小溝がこれである。二つは一の川の流れが大間廣に北で分れて越坂の北を過ぎ、船江上社の前より船江を横断して勢田川に入ったものであるが、今は絶えて、ただ常盤町の北にある下河原・敗北河原、大間国生社の後にある清盛堤、船江上社の前に在る臈が池などはこの残蹟と云われている。…（以下略）

平安から鎌倉時代初期の船江とその以北は宮川の激しい氾濫によって、支流の河道の変化を繰り返しながら陸化していった。それに従って人の居住が始まり、新しい道が出来て行った。

船江を横断する最大の河であった檜尻川はその昔は北宮川と称した大河であったが、宮川の大堤が完成した後は、上流の甫蔵主川より湧き出る水を流すのみとなり、川幅も徐々に狭まり水流も少なくなって、潮が入りやすくなった。檜尻橋も中世は長さ22間(40m)幅2間(3.6m)あったものが、17世紀初頭の江戸期になると長さ16間(29m)幅5尺(1.7m)に減少している。さらに大正14(1925)年の時点での架橋は長さ6間(11m)幅(1m)となり溝川となった。橋幅が狭くなっている理由はよく分からないが、明治になって神社と山田の往還が竹ヶ鼻から小木橋を経て船江前町に通ずる道路の利用が盛んになった所為であろうか(宇治山田市史)。

参考資料 宇治山田市史(山田史 地勢)

勢田川調小留書(7)伊勢・船江の探訪(1)



船江を通る道

船江道

我が船江から山田に通じる道で、寛保元（1742）年発行の『山田惣絵図』にも記載されている。かなり古い歴史を持つ道である。

船江の地名の初見は平安時代末期の永暦元（1160）年2月付の畠券に「在箕曲郷下船饗村字三角畠」とある。具体的な場所は特定できないが、下船饗ということであるから船江の北部檜尻辺りと思われる。河崎の地名の初見とはほぼ同時期である。

この頃は平治の乱が終わり、平清盛を頂点とする平家が台頭し短い平家の時代が始まった頃であり、我が船江も源平の争乱に巻き込まれたことは既に記した。さて、船江道は船江墓地から船江新道を経由して、前町などの集落を抜け、更に新紺橋から西南進して、船江東古道（私の仮称）即ち檜尻から山田の東部に至る船江を南北に縦貫する古道（現在の八間道路に並走）と船江上社付近で交差して旧宇治山田中学、旧船江変電所（多分これらを知る人はいないのではないだろうか）から養草寺に至る田園の中に通じる畷であった。

養草寺から二手に分かれ一方は南下して鍛冶屋垣外から桜堂（現在の伊勢市駅西踏切）に、又一方は西に進み越坂を経て走下から、何れも月夜見宮の東側と西側に通じていた。

さて、月夜見宮周辺の土地は、古くは宮川の流域で西川原、東川原、高川原という地名で呼ばれ、しばしば水難に悩まされたという。

月夜見宮の祭神は天照大神の弟神の月夜見尊と同荒御魂といわれているが、由緒は定かではないが古い。古くは高河原と呼ばれ、農耕の神を祀る神社であったという。平安時代醍醐天皇の延長5（927）年の延喜式では外宮の首位の撰社で、鎌倉時代土御門天皇の承元4（1210）年に別宮に昇格した。

『伊勢市史』によると、月夜見宮の歴史は更に遡る。5世紀中葉の雄略天皇の時代に豊受大神を丹波国より奉迎した時、3カ月この宮に仮座したという（境内社の高河原神社か）。多分外宮を奉迎する以前は山田の人々の中心的な拠り所であったと思う。

太古、山田の北辺の地であった船江から月夜見宮を目指した船江道の起源は船江・河崎から鍛冶屋垣外、越坂などの集落を通して山田に中心に繋ぐ重要幹線道路であった。

なお、船江から山田の中心部を繋ぐ道路はまだ他にもある。後に記すが多くが月夜見宮に通じている。外宮が創始される以前の山田の中心は月夜見宮であったことは間違いでない。

参考資料 伊勢市史（中世編）伊勢市市史編纂室
山田惣絵図 伊勢文化会議所

旧神社道（きゅうかみやしろみち）

中世当時の神社（かみやしろ）と山田を繋ぐ往還、旧神社道は、神社から出発して県道 R201号線（明治19年に完成した宇治山田港・伊勢市停車場線）を横断し、港中学東から竹ヶ鼻・大口神社を経て神鋼電機構内を通り、国道R23号線を横断し、檜尻川の北の分流（現在は溝）に沿って、小木公民館（小木町605-3）前を西に進み小木橋から船江・前町に至る近世以降からの比較的新しい道ではないかと想像される（近世以前は船江・前町を通らず檜尻橋に結ばれていたのかも知れない）。何故なら小木橋は『山田惣絵図』には記載されていないからである。この旧神社道は田園地帯を通り沿道の集落を繋ぎ山田に通じる畷であった。『伊勢市史』によると、近世以降熱田・三河・遠州から来る船参宮道者の多くは、大湊や神社港から勢田川を遡り、二軒茶屋・河崎で上陸して、外宮から参拝するのが習わしであった。ところが明治になると神社港に上陸し陸路で山田へ出るようになった（私の注理由は不明）ため、幅員2.7mのこの道は馬車、人力車、通行人などで大混雑するようになった。更に明治17（1884）年に神社港に汽船を就航させるようになると、混雑は益々ひどくなった。

そこで、新道建設の計画が起こり、明治19（1886）年に幅員4.6mの新道、神社道が竣工した（県道201号線 宇治山田港・伊勢市停車場線）。新開の三叉路に竣工記念の道標があった（今は神社公民館に移されている）。

参考資料 伊勢市史（中世編・近世編）伊勢市市史編纂室

船江東古道（私の仮称）

現在では八間道路が伊勢市北部と山田中心部を繋ぐ幹線道路であるが、これにほぼ並行して檜尻橋から吹上善光寺に通じる古道がある。勿論、『山田惣絵図』にも画かれている。

檜尻橋を渡って斜め右手の側道に入り、墓地に沿って南へ旧トロッコ道を渡り旧東洋紡績工場の東を南下して、旧東洋紡績工場敷地をかすめて船江上社に通じる。この古道の片鱗を窺えるのが、墓地の東南の角からトロッコ道に通じる幅約1m、長さ1m足らずの今は誰も通行しない場所であると私は推測している。更に我が母校、旧宇治山田中学校庭の東を南下して、中橋西の八間道路河崎交差点付近で、一旦八間道路の東に出たあと八間道路に吸収され、一方は善光寺から山田の中心部（外宮）へ繋がる。又、一方は八間道路に架かる近鉄線のガード下（「クックエディー八間道路店」の南）から清浄坊橋、宇治道、寝起松を通り古市から内宮に通じる。この道は多分、船江、河崎の集落が未発達時代に、当時北辺の船着場、檜尻と山田の中止部（外宮）や宇治（内宮）を結ぶ幹線路であった。

案ずるに、この道は古くは前に記した塩屋御園、大塩屋御園から内宮、外宮へ塩の献納に使われた旧御塩道にもなった。中世以降からの古い古道である。

塩屋御園の領家は外宮権禰直度会神主と推定され、鎌倉期から室町期にかけてこの塩屋からこの道を通って外宮へ塩の献納が行われていた。

もう一方、大塩屋御菌の領家は内宮権禰宜荒木田氏であり、南北朝時代から戦国期にかけて、この道から清浄坊橋、宇治道を経て内宮に塩を献納してきた。明応の大地震・津波とその直後の大風・洪水（明応7年、1498年）により宮川の流域変更があり、この御園の製塩業は壊滅し、両宮への塩の献納も二見にその座を譲るまでの間続いた。

この宇治への道と山田への道との分岐点となるのが、「クックエディー八間道路店」附近である。『山田惣絵図』によると、この辺りに幕府の山田奉行所の公事屋敷跡があった。「御屋敷」という小名があったという。『宇治山田市史』によると、この公事屋敷がこの地に置かれたのは、寛永7（1630）年から同12（1635）年に小林村に移されるまでの5年間であった。この『山田惣絵図』が寛文2～3（1662～1664）年に制作されたということであるから、同屋敷の鎮守であった小祠を御屋敷稻荷と称した跡地ということになる。

私の能力では、その場所が何処であったかを、現在の地図でその四至を特定はできないが、察するに伊勢市駅北口から八間道路を横切り、「クックエディー」、「伊勢シティホテル」、「八木学園」を含む広範囲な場所であった。言い換えれば、幕府は北辺の新開地と山田と宇治を結ぶ古道の分岐点に公事屋敷を設けたと言える。

参考資料 角川日本地名大辞典（旧地名編）JLogos 版

船江中古道（私の仮称）

この船江中古道と次に記す船江西古道はその殆どが痕跡を残していない。『山田惣絵図』と『伊勢山田市街』（三重県管内全図付図 明治19（1886）年 三重県史編纂班）を合わせて二つの道を推定する。その一つがこの道である。他のもう一つの道である船江西古道は次項で考える。

この道は檜尻橋を渡り墓地の北側を西に進み、現日赤の東を西南に進んで、旧東洋紡の敷地を斜めに横断して、養草寺の西側で船江道に合流する。この道は檜尻と船江領が存在したという越坂をも結び、更に山田の中心部月夜見宮を最短距離で結ぶ幹線道路でもあった。途中には集落はなく、畦道程度の道で、強いて言えば平安海進で水没したと推測される甘露地集落（私の仮称 勢田川調小留書（8）参照）を貫通している。

『宇治山田市史』によると、越坂は一之木町に所在するが、宮後町領、船江町領などが混在した耕地であったが、寛文10（1670）年の大火後、養草寺等山田市中の寺をこの地に移建し、越坂寺町という集落が生まれたという。従って『山田惣絵図』の成立はそれ以前であるから、この道の終点は耕地であった越坂船江町領（現在の養草寺附近）であったと推定される。

参考資料 山田惣絵図 伊勢文化会議所
宇治山田市史（山田史 地勢）

船江西古道（私の仮称）

この道は前記した中古道から、日赤付近で分岐して、旧甘露地集落の北縁から西縁を廻って、逢坂で船江道と合流して月夜見宮、即ち山田の中心部に通ずる。中世以降に新しく造地された北辺の集落と山田の中心部を繋ぐ道となった。

参考資料 山田祖絵図 伊勢文化会議所

船江集落内の道

旧船江町に何時の時代に、人の居住が始まったか定かな記録はない。当町の古名、船饗村の初見は永歴2（1161）年の畠券に「在箕曲郷下船饗村字三角畠」とある（光明寺舊記）。

さて、船江の集落がいかんにか生成されたかを拙稿『勢田川調小留書7 伊勢・船江の探訪（1）（消えた「字」を追って）』を次に引用する。

河崎地区に隣接する西町、天路、前町、新道、狐垣内の東側の一部が該当する船江地区の古集落は、自然堤防上に立地されている。その他の船江地内は概ね「氾濫原」と分類されており、古人は旧河道、後背湿地を盛土開拓し田畑として営農していたと思われる。

伊勢市の場合、南部の段丘に生ずる扇状地の末端には湧水帯があり、又宮川、勢田川、五十鈴川等の河川の氾濫により、それから下流は傾斜を減じて自然堤防の発達し易い平坦な氾濫原（盆地床）となる。河川（旧河道を含む）はこの氾濫原の地域を流路を変えながら蛇行し現在より大きく内陸部に入り込んだ伊勢湾に流れ込んでいた。船江地内の檜尻川流域の兩岸、象野、檜尻、藤郷、柳原、溝畑、出口、的場、林などの氾濫原と、八間道路以西の船江地内即ち高木、甘露地、狐垣内西部、釣瓶、横枕、濱田つまり、北宮川、甫蔵主川（檜尻川の上流）、落合川（甫蔵主川から分岐して朧が池を通り有連橋から勢田川に合流）などの旧河道の氾濫原地域では、流域変更により小規模の自然堤防・後背湿地となり住居地とはならず田畑として開けた。

船江・河崎地区は中央に勢田川という水利を持つ大規模な自然堤防の上に成立した。当時の船江の集落は河崎に隣接する西町、築地（織豊時代末期慶長年間に盛土（この頃に堀留が出来たか）から天路、前町、新道、狐垣内へと広がったと思われる。明和8（1771）年の船江町の戸数は337戸であった。古集落が存在していた現在の船江2、3丁目の平成23年5月31日現在の戸数は1,049戸である。当時と比較した住居地域の広がり約3倍と考えると、船江新道には現在と余り変わらない密度で、茅葺の民家が道沿いに櫛比していたと思われる。火事でも起これば一瞬にして集落全体が燃え尽きてしまったであろう。

船江町の旧名「船饗村」の初出は『光明寺舊記』永歴2（1161）年に畑地の売買の記録があるから、平安時代後期には既に存在した古い集落であった。船江・河崎の集落は勢田川を挟んで出来た自然堤防とその周辺を取り囲む氾濫原に出来た後背湿地・北宮川（甫蔵主川・檜尻川・小柳川など）の分流の合流点にあり、居住・営農に恵まれ古くから集落が発生したと思われる。

(前項に記した私称「船江東、中、西古道」)は、山田の中心部と繋ぐ畷の道で、畦道を少し太くしたこの道を往古の人達は忙しく行き来したのだろう。甘露地を通るこれらの畷は明治25(1892)年測図以降の地図には表れていない。何れにしても字高木、字甘露地内は盛土地とされている。何時頃盛り土されたかは不明である。

荒木田氏後裔定俊権禰直の長子定満は、鎌倉時代建久5(1194)年に「船江長官」と号した(系図は未確認)。船江は箕曲郷に属する農耕地帯であるから、新田開発と関係があると考えられる。伊勢市役所所蔵の『和紙図』から船江地区を土地用途別に色分けすると、圧倒的に農耕地が多く、旧河道や氾濫原の荒地を盛土して農耕地を生み出したことが想像できる。何時の頃かは分からないが、12世紀に荒木田氏の一族によって行われたと私は推論してみたい。

農耕用の水系と恵まれ耕地に囲まれた船江の集落は平安朝の末期頃から開けたと思われる。平安海進で甘露地集落が水没した後、海面水位が下がり船江一帯が陸化すると、南部の丘陵地から新天地を求めて多くの人達が移住して、肥沃な耕地に囲まれて発生して出来た道即ち、現在の船江新道を中心とする集落が成立した。『宇治山田市史』(地史 船江)によると、この河崎七軒町から檜尻橋に通ずる船江新道は江戸期初期の寛永年間(西暦1624~1643年)の『山田惣図』(私未確認)には記載されて居らず、多分これ以降の開通道路であろうという。一方、寛文2~3(1662~3)年頃に作成されたといわれる『山田惣絵図』では、檜尻橋迄は通じていないが、集落内の中央幹線として前町と天路の間が整備されていたと思われる。これは江戸期初期のことであり、それ以前は路地の様な狭い通路であり、この道を挟んで人の居住が始まり、新しい道を生み、面として東西南北に集落が伸長し、現在の船江の原型が出来上がった。

参考資料 宇治山田市史(地史編)

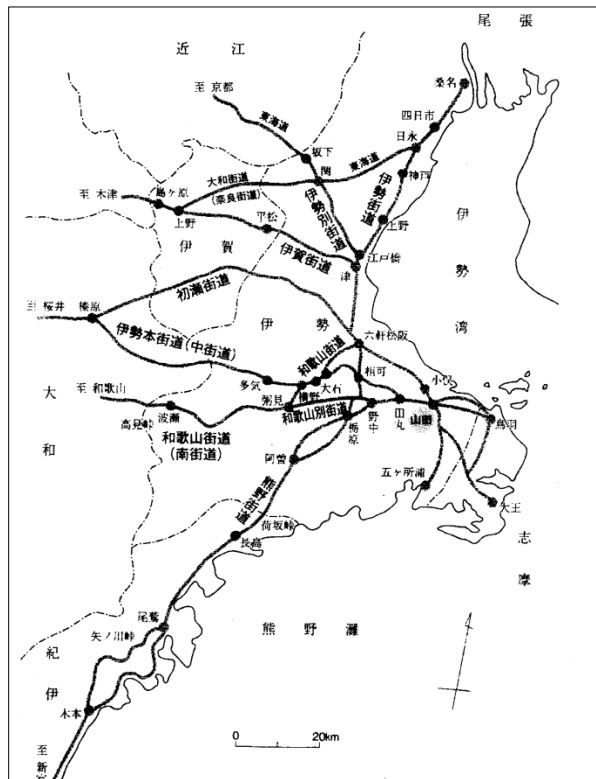
勢田川調小留書7 伊勢・船江の探訪(1)(消えた「字」を追って)大屋行正

全国から伊勢に通じる主な参宮道

伊勢は門前町として世に知られているが、伊勢神宮は天皇家の氏神として、また国家の宗廟として私幣が禁断され、長らく閉鎖的な信仰のもとに庶民社会とは遮断されて来た。

中世に入って、将軍家など少数の支配層の参宮が始まり、庶民の一般参宮は室町時代中期以降といわれている。

然し、伊勢参宮の歴史は古く、鎌倉時代中期以降、室町時代初期にかけて、神宮信仰の担い手であった御師の布教が全国的に広まるのと歩を合わせるように、道の整備なども進み、旅がし易い環境が整っていった。戦国末期には織田信長の政策などによって各地の関所が廃され、参宮者の数も増加。更に、江戸時代になると、幕府主体の宿駅制度



の制定や交通事情の改善に加え、経済的・時間的余裕を持つまでになった庶民層も大いに旅を楽しむことができるようになっていた。江戸時代にあつては、旅そのものば娯楽であつた。中でも、伊勢は最も人気の高い旅の目的地としての地位を確立した。村などの共同体で講を作り、積立金を元手に代表者が伊勢まで旅して参拝(代参)するというケースも全国的に見られた。また、約60年に一度、“参宮ブーム”ともいふべき現象が起こり、年間何百万人もの参宮者が伊勢参りをした。これを「おかげ参り」と呼んだ。慶安3(1650)年、宝永2(1705)年、明和8(1771)年、文政13(1830)年に起つた「おかげ参り」は特に有名である。こういった人々を伊勢へと駆り立てた原動力としては、神宮信仰はもとより、旅そのものへの憧れや日常からの逃避も多いにあつた。実際に、講に属さない個人の参宮者も多く、中には、「抜け参り」と称して、家人や奉公先の主人には内緒で伊勢に旅立つた者もいた。日常からの脱却を、旅それも参宮に求めたという感覚は、現代人にも充分通用する感覚ではないだろうか。特に平成25年は第62回式年遷宮があり、伊勢参りがブームとなり空前の賑わいというのもその表れである。

さて、全国津々浦々から伊勢を目指すルートはいくつかあつた。最も有名なものとしては、「伊勢参宮街道」と呼ばれる街道で、京都、関東、東海方面からの東海道、四日市の日永追分で東海道と別れて伊勢を目指すルートが挙げられる。これは、十返舎九一の『東海道中膝栗毛』などでも紹介されているルートで、「伊勢街道」「参宮街道」の

別称もある。これに対し、西国、関西方面からの参宮者が辿った道筋のほとんどが、大和（奈良）を經由するものである。

奈良から伊勢に至る道は複数あるが、最短コースが「伊勢本街道」と呼ばれる道である。奈良（猿沢池）から出発し、三輪、初瀬（ここまでは初瀬街道とも）、榛原、山粕、菅野、奥津、多気、津留、相可、田丸などを経て、宮川を渡って山田（伊勢）に到る約129キロの行程だ。

各道路についての概要を以下に纏めた。

・**伊勢街道** 東海道は都と伊勢を結ぶ道のなかで最も低い位置にある道で、古くから畿内より東国への重要なルートであった。平安京（京都）から関、四日市、桑名を経て尾張に通ずる道、**東海道**つまり**現在の国道1号線**である。延暦13（794）年に平安京に遷都。仁和2（886）年、近江から鈴鹿峠を越える阿須波道が官道として開通し東海道と定められた。伊勢街道は四日市の日永で分岐し、**県道103号線**、**県道6号線**などを経てほぼ**国道23号線**に沿って南下して、神戸、上野、江戸橋、松本市雲出本郷町で初瀬街道を分岐して、六軒（小津町）で、現在の伊勢街道は国道23号線から分岐し、**国道42号線**となり更に松本市宮町交差点で**県道37号線**として分岐して外宮に至る（国道42号線は熊野方面に至る）。然し、昔の伊勢街道は**国道42号線**の久米から**県道756号線**（松阪環状線）榎田橋から**県道428号線**（伊勢小俣松阪線）となり、近鉄線に沿って斎宮、明野、小俣を経て宮川橋（桜の渡し・下の渡し）、中川原を経て外宮に至るおおよそ18里の道である。

斎王の群行路もこの新しい道を使うことが定められた。その為、大和から伊賀を通る道（大和海道・伊賀街道）は停止された。23代目の伊勢斎王として光孝天皇の皇女繁子（はんし）がこの道を通って群行したと言われている。平安京から伊勢へは、この**鈴鹿峠越え**は最短コースである。

・**伊勢別街道** 関宿東追分（関町）から東海道と分かれて、ほぼ**国道10号線**に沿って、楠原・椋本・高野尾を通り、窪田で分岐して**県道410号線**となり窪田・一身田を通り、一身田で県道410号線から分岐して、一身田市中を南下して江戸橋西詰めで伊勢街道（国道23号線 参宮街道）と合流する5里半（約22キロメートル）の街道である。

なお、伊勢別街道という名称が定着するのは明治時代になってからのことで、それまでは「山田道」「いせみち」「伊勢参宮道」などと呼ばれていた。要するに関宿から津江戸橋の間をショートカットした凡そ4里16町の街道である。

東海道が開かれたのは平安時代のことである。奈良時代末期の仁和2（886）年に鈴鹿峠越えのルートが開通すると、京都方面から伊勢への参宮道となった。その頃の古い伊勢別街道は、椋本（芸濃町）から県道42号線として安濃川沿いに南下し、殿村付近の**国道163号線**（伊賀街道）殿村北I/Cに至るものである。現在のように豊久野を通るルートとなるのは室町時代のことで、応永25（1418）年には将軍足利義持が伊勢参宮をした時に、豊久野・窪田・部田（津市上浜町辺り）を通過したことが記

録にみられる。

江戸時代には、「脇往還」の一つとして整備され、途中には楠原(雲濃町)・椋本(雲濃町)・窪田の宿場が設けられ、本陣や問屋場が置かれた。京都方面からの参宮道としてにぎわい、街道沿いには参宮の講が常宿とした旅籠が並び、常夜灯や石柱などが寄進された。客が往来したことが知られている。

- ・**大和街道** 大和街道・伊賀街道が通る伊賀国は、伊勢・近江・山城・大和の国々に囲まれた山国で、上野盆地に入るためには、どの道を通っても険しい山を越えなければならなかった。然し、伊賀国は伊勢と近江・山城・大和を繋ぐ交通の要衝であった。

大和街道(旧国道25号線)は、江戸時代には加太越奈良道と呼ばれ、関の西の追分で東海道から分岐し、加太峠を越え、三重県をぬけて奈良へと続く街道である。ほぼJR関西線に沿って、**新国道25号線**(名阪国道)の北側を通り**旧国道25号線**と言われている道である。この街道は上野市内で**国道163号線**(大和・伊賀街道)と合流して、島ヶ原を経て奈良に通じる。

この道の歴史は古く、西暦7世紀、大海人皇子が壬申の乱の時に、あるいは、西暦12世紀、源義経が木曾義仲を討った時に通った加太峠越道が、この街道の原型とされるという。この歴史の英雄たちが駆け抜けた道は、現在はほとんどが農道となり、一部は拡張されて旧国道25号や国道163号(伊賀街道)になって奈良に通じている。慶長13(1608)年、徳川家康の信任も厚い藤堂高虎は、伊勢、伊賀の藩主に移封されると、国の防衛のため伊賀の道は険しいままにしておくようにと命じ、伊賀国への入口とも言うべき「伊賀の七口」に兵を置いて領国を守るという政策を取った。これは、高虎がこの地へ移封されたのが、大坂方への前進基地の意味を持つためと思われる。同様に高虎は津を平時の時の城、伊賀を「秘蔵の国」すなわち万一の時の本城と考えていたのである。この街道は大和地方諸国の大名が参勤交代の時に利用する道であり、伊賀国と山城国を結ぶと同時に木津川の水運につながり、淀川を経て、下流の京都・大坂という二大都市そして外洋へと続く重要なルートでもあった。

伊賀地方は大和地方に隣接し、東大寺などの影響も強かった。また、さらに古代に遡さかのぼってみると、この地方は古墳の密集地帯でもあり、遙か古代から畿内の進んだ文化が流れこんでいた。おそらく木津川という長大な流れが、人や文化を運ぶ天然の道となってきたのだろう。そして、大和街道はその歴史の流れを受け継いだ街道である。

- ・**伊賀街道** 伊勢国と伊賀国にまたがる**伊賀街道**は、津から長野峠を越えて上野に至る全長約12里(約50キロメートル)の街道で、現在の松阪市中林町(旧三雲町)の月本の追分を起点とする奈良街道(古くは「伊賀越奈良道」)を津市吹上で吸収する。道は現在の**国道163号**に略沿う形で通っており、今でも国道沿いのあちこちに、かつての街道の面影が残っている。

津城下を出発し、長野峠を経て上野で大和街道(旧国道25号線)と合流して、島ヶ原

と抜けるこの街道は、東海道のような主要幹線道ではなく、大和、山城方面と伊勢神宮を結ぶ参宮の道としての性格を備えた地方路のひとつに過ぎなかったが、慶長13(1608)年に、藤堂高虎が伊勢・伊賀二国の大名として移封され、津を本城に、伊賀上野を支城としたため、津を起点に藩のふたつの拠点を結ぶ津藩内の最も重要な官道として整備された。これが現在の伊賀街道である。街道には伊勢国側に前田宿(後の片田宿)、長野宿、伊賀国側に上阿波宿(後に平松宿)、平田宿があり、宿には公亭とも御茶屋とも呼ばれる藩主の休泊所が設置され、伊賀街道の官道としての性格を物語る。宿場の西に設けられた火除土手は、津藩の街道の特徴で、かつてはどの宿場にもあったと思われるが、現在は北長野のものが現存するのみであるという。この道の発祥は比較的新しいと思われる。都と伊勢の距離を最短化しようとして出来たが、藤堂藩が領地の津と伊賀を最短距離で繋ごうとして整備されたとも思われる。

然し、この街道は、上野経由で伊勢に向かう参宮の旅人が利用したりしたが、参宮道や官道としてだけでなく、津方面からは水産物や塩が、伊賀方面からは種油や綿などが津へと運ばれ、その一部は江戸まで船で運ばれるなど、伊賀・伊勢両国の物資や人が行き交う経済・生活の大動脈としての役割も担っていた。このため、街道沿いは宿場を中心に賑ったという。多くの文人墨客や俳聖・松尾芭蕉も長野峠越の道を利用し、街道筋にはいくつもの句碑が建てられている。

・**初瀬街道** 京・大和(奈良)方面と伊勢を結ぶ**初瀬街道**(はせかいどう)の全長は約十四里十七町(約56km)。現在の松阪市六軒から青山峠を越え、名張を経て初瀬へと至ることからその名がある。

現在の**国道165号**、あるいは近鉄大阪線に近いルートを通るこの道は、古くは「青山越」「阿保越」、参宮表街道、参宮北街道とも呼ばれ、西暦7世紀中葉、壬申の乱の際、大海人皇子が名張に至った道であり(名張街道を経由して伊賀上野で伊賀街道に合流)、また天皇に代わって伊勢神宮の天照大神に仕えた斎王が伊勢へと赴いた道である。この道を通った最初の斎王は西暦7世紀後半、天武天皇の皇女大来皇女である。

飛鳥時代、藤原京時代(西暦7~8世紀初頭)には、大和と伊勢神宮を結ぶ伊勢路の北路となり、平城遷都以後も奈良と伊勢を結ぶ幹線道路であった。

平安遷都以後、平安京から鈴鹿越えで伊勢に向かう官道ができ、また、伊勢国司・北畠氏が拠点を置いた伊勢本街道などが利用されるようになったため、初瀬街道は一時衰退したが、伊勢参宮や伊勢からの初瀬詣が盛んになるにつれ、険しい山道の多い伊勢本街道よりも比較的平坦な初瀬街道が利用されるようになり、江戸中期から明治初期が最も賑わったという。

当時、参宮客は初瀬で一泊し、青山峠の麓の伊勢地宿(伊賀市)でさらに一泊、翌日は二本木(津市白山町)で昼食を取り、六軒で三泊目。大阪方面から伊勢へは片道4~5日の旅であった。

初瀬街道が伊勢街道から分岐する六軒(松阪)は、伊勢音頭の道中唄で、「明日はお立ちかお名残惜しや六軒茶屋まで送りましょう。六軒茶屋の曲がりとてもみじのよ

うな手について…」と歌われ、青山峠の麓の垣内宿では、「青山峠のふもとの八重坂までなりとおくりましょう。もみじのような手について（略）青山峠を越すときに、三つつぶの雨でも降ったなら、私の涙と思うてんか」と歌われているなど、道中伊勢音頭からも多くの参宮の旅人が行き交った当時の様子をうかがうことができる。

・**伊勢本街道** この**伊勢本街道**は大和国と伊勢神宮を結ぶ街道で、別名・参宮本街道、伊勢中街道とも呼ばれる。街道沿いには、古代祭祀遺跡も多い。三輪山（奈良県桜井市）と斎宮（三重県多気郡明和町）そして伊勢神宮を結ぶルートは、北緯34度31分の線上にあり、いわゆる「太陽の道」との関わりがあるという俗説もある。

この街道は奈良県榛原で**国道165号線**（国道初瀬街道）から分岐して**国道369号線**となり、奈良県御杖村敷津で**国道368号線**と合流して、伊勢本街道となり東進して伊勢奥津、北畠氏の本拠地多気を経て横野で、**和歌山街道（国道166号線）**と大石まで合流して大石から**県道700号線**、下茅原から相可まで**県道421号線**、あと田丸を経て、JR紀勢線・参宮線に付かず離れず伊勢市に入り、**県道13号線**（和歌山別荘道（東）熊野街道）に合流して外宮に至る。

この街道は伊勢参宮最古の道であるが、都の遷都により大和街道、伊賀街道などにその主座を譲った消長が上記の道路の整備状況から伺える。

飛鳥・藤原時代（西暦7～8世紀初頭）には大和と伊勢神宮を結ぶ重要な道であったが、奈良時代には、初瀬街道が利用され、平安京遷都後、鈴鹿峠越えが主流となると、一時期衰退した。しかし、南北朝以後、伊勢国司北畠氏が現在の津市美杉町の多気に館を構え、多くの武士団が居住し、初期城下町を形成すると、その城下を通る伊勢本街道が再び重要視されるようになり、伊勢参宮者の増大にともない、多くの人々が行き交う街道へと変遷していく。北畠氏滅亡以後も宿場町の機能は残り、伝馬所が置かれ、江戸末期には旅籠も9軒ほど存在したとされている。

また、この街道は、大和から伊勢への最短コースにあたるが、けわしい山道が多く、旅人に恐れられた。本居宣長の紀行『菅笠（すげがさ）日記』には、宣長が大和の旅を終えた帰路、榛原で一行に本街道越えを指示した際の様子を描かれているが、一行はこの道を通るなど考えただけでも恐ろしい、とふるえあがっている。

しかし、神代の昔に**倭姫命が天照大神鎮座の地を求めての旅**に関わる伝承も多いことから、「神の御心に叶う道」として多くの参宮の旅人に利用されたのである。

明治に入ると、街道の改修、新道建設が盛んとなり、馬車・荷車が通行できない峠道の改修、迂回路の建設が各所で進められ、伊勢本街道は時代に取り残されていった。

かつて参宮者で賑わった旅籠も廃業に追い込まれ、沿道の人口も減って過疎化が進んだ。その代わり常夜灯や道標、旧旅籠の遺構、細くうねるように続く旧道の名残が随所に残されかつての古い町並みの姿を今に残している。

伊勢本街道は距離は最短であるが、険しい山道が多く、平坦な北街道（初瀬街道）の利用者が増え寂れてしまった。

以後、雲出川上流域と伊勢・松阪方面を結ぶルートとして利用されたが、大正年間、

津から雲出川上流域へのバス路線の開通、昭和10年名松線の開通などにより次第に衰微した。

- ・**和歌山街道** **国道166号線**（和歌山街道）は、紀伊半島をほぼ東西に横断し、伊勢・大和・紀伊の三国を経て松阪と和歌山を結ぶ街道である。厳密には和歌山街道とは、高見峠までの三重県側の部分を指し、紀州側では伊勢街道と言われる。紀州藩の藩道でもあったことから紀州街道、庶民の生活道として大和地方との関わりが深くなると大和街道とも呼ばれるようになった。

この街道は、伊勢参宮や熊野詣、吉野詣の巡礼道として、また、南紀や伊勢志摩地方の海産物や塩等を大和地方に運ぶ交易路としても重要な街道であった。

高見峠等の難所はあったものの、海岸路に比べて大幅に距離が短縮されるため、和歌山街道は単なる生活道としてだけではなく、全国交通系の一環をなす重要なルートとなっていた。そして、五街道を模して駅制や七里役所制が紀州藩によって整えられ、御役米を免除し、使役の人馬の賃銀が支払われるなど、藩内の他の街道に比べて優遇されていた。

また、松阪市飯南町横野から小片野町までの道筋は、伊勢本街道と重複するルートをとる。

- ・**和歌山別街道** 現在の松阪市飯南町粥見で和歌山と松阪を結ぶ和歌山街道（**国道166号線**）の粥見で分岐し、**国道368号線**（和歌山別街道）となり勢和村丹生で**国道42号線**（熊野街道）に合流する。多気町仁田で**国道42号線**から**県道13号線**（和歌山別街道・東熊野道）として分岐。野中、田丸を経て小俣町掛橋で**県道37号線**（伊勢街道）に吸収される。途中、井戸谷付近から分岐する**県道150号線**（前村野中線）で、野中で**県道13号線**に吸収されるという説もある。伊勢参宮の道として多くの旅人が利用した。

和歌山街道が、江戸期、紀州藩の本城と東の領地である松阪城とを結ぶ道であるとすれば、この街道は、本城と田丸城（現在の玉城町）を結ぶ道であった。

また、この街道を粥見から田丸に至るまでの道と捉えるならば和歌山別街道と呼ぶことができるが、高見峠をこえて伊勢に向かう参宮のルートと捉えるならば、初瀬街道（北街道）、伊勢本街道（中街道）と並んで**伊勢南街道**と呼ぶことができる。

- ・**熊野街道** 紀伊半島南部にあたる熊野の地と伊勢や大阪・和歌山、高野及び吉野とを結ぶ古い街道の総称で、**熊野古道**とも呼ばれている。熊野街道には伊勢と熊野速玉大社を結ぶ**伊勢路**。その伊勢路の花の窟（はなのいわや）から分かれて、熊野本宮大社に向かう**本宮道**のほか、大阪から和歌山を経て熊野に至る**紀伊路**は田辺で熊野本宮に向かう**中辺路**と、そのまま紀伊半島を海岸線沿いに那智へ向かう**大辺路**、高野山から熊野本宮へ向かう**小辺路**、吉野から熊野本宮へ向かう**奥駈道**とも呼ばれる大峯道などのいくつかのルートがある。

この熊野街道は伊勢側から出発すると、**伊勢街道**（**県道37号線**）を小俣掛橋で分岐

し、田丸を経由する**県道13号線**となる。途中、多気野中で分岐して**県道709号線**（相鹿瀬大台線）となり、栃原で**国道42号線**に吸収され、以後ほぼ**国道42号線**に沿って熊野速玉大社に向かう街道の総称である。

以上の陸路の他、対岸の知多半島常滑、河和などから、大湊、神社、二軒茶屋への海路もあり中世以降、全国からの伊勢詣が盛んになった。

参考資料 伊勢市史(中世編) 伊勢市史編纂室
歴史の情報蔵 三重県史編集班
門前町 藤井利治 古今書院
みえの歴史街道 三重県環境生活文化振興課

古い船江の歴史に登場する道

1. 船江合戦に平信兼が湧け付けた道

船江合戦については、本稿3ページに『吾妻鏡』の治承5（1181）年正月21日の条に記述されていると紹介した。その概略は次の通りである。

治承5年1月5日に熊野山の反平家の宗徒等が波切を襲い、更に1月19日、熊野の衆徒が伊雑宮に乱入し、神殿を破壊する乱行を行ったうえ、1月26日山田・宇治両郷に襲来し民家を焼き、財産を奪い取った。

熊野の衆徒は更に志摩一帯の民家を襲い、伊勢平氏の家人は守りを捨てて逃亡した。勝ちに乗じた衆徒は二見が浦の人家を焼き払い攻め上り船江の辺りで、平家一族の関出羽守信兼の一隊と遭遇し、**僧侶の張本人戒光が信兼の矢に当り戦死した**。主を失った衆徒は二見に逃げ帰り、下女・小童を捕まえて船に乗せ熊野へ逃げ帰った。つまりこの騒動の結末は**信兼によって船江で鎮圧された**。

この時代に於ける我が瀬内江周辺の地勢ほどの様な状態であったかを推測して見る。

私の学習記録『勢田川調小留書（8）』によれば、この頃は平安海進の海水準変動の最高潮位の時期に当り、宮川、勢田川、五十鈴川等から流出される土砂による造地活動が盛んで、檜尻川以北の三角州が現在の湊地区を目指して成長中であった。**隣町の小木町に古城と言う大字があるが、平安後期に造成された新開地であり、熊野衆徒を敗走させた平家一族の関出羽守信兼の支配する砦があったのではないか。多分この近辺が、小舟の発着する伊勢湾に面する船着場であったと思われる。**

反平氏の熊野の暴徒を船江で鎮圧したという関出羽守信兼とはどのような人物であったのか。

平姓関氏は伊勢国鈴鹿郡関谷を本拠とした豪族であり、出自には諸説あり定かではない。『吾妻鏡』では伊勢平氏平維衡の五世の孫、関信兼（出羽守）をもって祖

とする説もあるが、実際は維衡の末裔とされる鎌倉時代の御家人である関実忠が伊勢国鈴鹿郡関谷を賜り、関氏を称したのが初代と伝わるが、実忠以降の数代の事跡は明らかでない。

何れにしても、伊勢平氏の祖と言われる平維衡以降、鈴鹿関谷一帯を支配していた豪族の一族であった。

その五世の孫である信兼は関庄（現在の亀山市の関）、曾祢庄（現在の松阪市市場庄町から米の庄、久米町一帯に所在した荘園）、飯高町滝野辺りを支配していた。

信兼の本貫地は鈴鹿郡昼生荘（関一帯）にあり、その為「関」を名乗ったと言われる。

曾祢荘は、現在の松阪市市場庄町から中ノ庄・上ノ庄町にかけての、今も「米（よね）ノ庄」と総称されている地区と、隣接する久米町一帯に所在した荘園である。

また曾祢荘には、松崎浦一帯の海浜部も含まれていた。平安時代の末期、仁安元（1166）年に平信兼が曾祢荘の預所（あずかりどころ）に任じられたといわれる。「預所」とは、現地で荘園の経営にあたる荘官のひとつである。

信兼の伊勢の所領としては前述の昼生荘の外に、近衛家領一志須賀荘領所、醍醐寺領一志曾根荘、波出御厨、須賀荘「信兼党類領」等があつて、伊勢地方ではかなりの力を持っていた（これらの地域の所在については私の地理の知識では確認できない）といわれる。

然しこの地域は川俣谷といわれることから、和歌山街道（国道166号線）を橿田川に沿って上った香肌峡附近一帯と推定出来る。この地は伊勢平氏の祖である平維盛以来の本拠地である。

信兼は壽永二年（1183）七月の平氏都落ちに加わらず、元暦1（1184）年7月、平田家継らと共に蜂起、鈴鹿山を切りふさいだ。このため、翌月源義経によって子息は殺害され、信兼も追討を受けた。

元暦一年（1184）八月十一日、義経は、信兼が西海の平家に呼応すると聞き、伊勢三郎義盛をして、信兼の居城、滝野城を攻めた。

信兼は従う郎党百余人と共に城内に籠もりよく戦ったが、衆寡敵せず城に火をかけて信兼以下自害した（源平盛衰記）。

さて、平信兼は若くして都に出て、平氏一門として北面の武士となって活躍した。その主な経歴は次の通り。

久壽2年（1155） 時の権力者藤原頼長の行列に矢を射かけるという意気盛んな若者であった。

保元元（1156）年 鳥羽法皇から万一の時には、宮中へ召すべき五人の武士の一人に義朝らと共に挙げられた。

保元の乱には80余騎を従え天皇方に味方し、戦功により出羽守（1156）に任じられる。

応保元～承安元（1161～1171）年 河内守に任ぜられる

承安2～治承4（1172～1180）年 和泉守を歴任する。

治承5 (1181) 年 船江の合戦

寿永2～3 (1183-1184) 年 二度目の和泉守を歴任。

元暦元(1184)年 義経は、信兼が西海の平家に呼応すると聞き、伊勢三郎義盛をして滝野城を攻めさせた。信兼自刃。

従って本格的に任地から伊勢へ戻ったのは一の谷合戦の元暦元(1184/2)年の後と思われるが、治承5年の無役の時代には本拠地に帰っていたと思う。従って、「船江の合戦」は平氏の滅亡前の無役の時に起こった。

熊野の衆徒による乱行を何処で聞いて、何処から船江にはせ参じたか確かな資料はないが、私は信兼の終焉の地となった和歌山街道沿いの飯高町滝野に居住していたと思う。

信兼は騎馬を走らせ和歌山街道、和歌山別街道を経て、野中、田丸を経て、小俣町地内の宮川左岸で旧伊勢街道に出て、宮川橋付近の桜の渡し(下の渡し)を突破して、中川原から二見街道の月夜見宮で左折北上して越坂で船江道に入り、船江西、中古道から船江地内の合戦場への約40kmの道のりを駆け付けたものと思われる。確かな証拠はない。

2. 平知盛の壇ノ浦から「伊勢平家むら(横輪・矢持町)」への経路

既に記した通り、私は間宮氏の見解に従い知盛は壇ノ浦から誰かの手により脱出して、伊勢の矢持町に塾居しこの地で他界したという説をとることとする。

上記の話が何故船江に関係あるのか。間宮氏の書かれた『伊勢市の平家むら』に森田利吉氏の『三重の文化4』(三重県郷土会)に投稿された「久昌寺臨時見学記」として紹介された『中津家由緒書』の中に次の記述のあることも既に記した。

平知盛西国壇之浦没落之節、舟ニ而南海ニ廻リ伊勢神領山田之内舟江村ニ上リ、山田前山ニ引込四年居住仕候所ニ、世間不審仕候様申ニ付、又山奥覆盆子谷(いちこたに)ニ引越居住仕候。

つまり、知盛は丹波から南下して多分、神戸辺りから船で紀伊半島を廻り、当時山田の海の玄関口(私の推定)であった船江に上がり、外宮長官横地光忠の助力により、前山を経て矢持へ塾居することとなった。私の推定では上陸地点は檜尻橋の北から大字古城辺りであろう。平安末期から鎌倉初期にかけての船江には東部の高地(船江新道、船江道を挟む地域)を除く、旧甘露地集落のあった低湿地には人家は殆ど存在しなかったと思われるが、山田の海の玄関口から町の中心部へ繋ぐ「道」は存在したと思われる。

古城周辺の海岸に小舟でたどり着いた知盛一行ほどの「道」を経て外宮に至ったのであろうか。

私の推定ではこの時代、古城周辺の海岸から山田の中心部への道は、既に記した通り、船江道(船江新道を含む)、船江東、中、西古道(何れも私の仮称)の4本の幹線道路

があった。

船江道は船江東部の集落から山田の中心部へ通ずる道であり往来もかなり賑やかであったと思われ、知盛たち落武者の通る道ではなかった。船江東古道も同様に集落に近く矢張り避けられた道であろう。

とすれば、知盛一行は二手に分かれて、船江西部の地帯を通り抜ける船江中、西古道を駆け抜けて月夜見宮を経て外宮をめざしたと思う。然し、確かな証拠はない。

2. 塩の道

平安末期から鎌倉初期の船江が、かつて栄えた「甘露地集落」の水没後、河口部の氾濫原は大湊を目指した三角州が成長したことは前に記した。

中世、伊勢湾の海水が、遡上する宮川の下流の右岸域、即ち御菌町の長屋から馬瀬町、御菌村新開辺り、更に大湊の海岸線にかけて開けた「塩の荘園」が、塩屋御園、大塩屋御菌であった。我が船江の北隣地から、中世以降新しく造地されたとと思われる三角州一帯であることも既に記した。

この塩屋は神宮の大切な御塩を調達していたが、明応7（1498）年の明応の大地震による津波で塩田が壊滅状態となり神宮への御塩の献上を二見に譲ることになった。

前にも記したが、「塩屋御菌」は船江の北、新開、下野を中心に外宮の渡会氏により開かれ、又、「大塩屋御菌」はそれ以西の御菌町、大湊の一部の地域で内宮の荒木田家により開けたらしい（6ページの図参照）。

塩屋御園は西暦13世紀初頭には既に外宮の渡会氏によって開拓されていた。従ってその起源は平安時代まで遡ることが出来よう。

又、大塩屋御菌の初見は塩屋御菌より遅く西暦14世紀中葉に荒木田氏によって開発されたとされている。

当時の渡会氏と荒木田氏の関係はどうであったのか。

神宮と朝廷の関係が、資料上に現れるのは壬申の乱の天武天皇以降と言われている。神宮の祭祀を実際に担当していたのが、上記した渡会氏と荒木田氏である。

渡会氏 奈良時代以前は磯部を名乗り、伊勢地方に太古以来住んでいた漁労航海を職業としていた豪族であろう。倭姫命を助け内宮の創祀にも関係があるという。奈良時代の和銅4（711）年渡相神主の姓を与えられて、渡会氏と称し、外宮の禰宜の地位を一族で世襲してきた。渡会氏は古くからの地名渡会を名乗り、その前身は伊勢の国名にもゆかりのある磯部氏であることから、荒木田氏よりも古い在地氏族であったといえる。

荒木田氏 内宮の禰宜の地位を世襲していたが、その名が正史に登場するのは、渡会氏より遙かに遅れ平安時代の元慶3（879）年である。

荒木田氏は律令制下にあつて神祇官の中心であった中臣氏の支族とされている。中臣氏は後に神宮の祭主として伊勢に臨むが、荒木田氏はその関係を強調している。

荒木田氏と渡会氏の関係は神宮の創祀に関わる重大な物語がありそうであるが、

これらは別の機会に学習したい。然し、両家の支配勢力は渡会氏が先行していたが、南北朝時代の南朝衰退により逆転していったと思われる。

渡会氏によって開けた「塩屋御園」の御塩は外宮へ献納され、南北朝期に荒木田家によって受け継がれた「大塩屋御園」の御塩は渡会氏に代わって外宮、内宮へ献納されていたと考えられる。

さて、これらの御園で製塩された御塩はどの道を通して神宮に献納されたか。

二見から外宮への御塩道は二見道から清浄坊橋を経て、現在の八間通路に架かる近鉄のガードをくぐり JR の踏切を渡り右折して、吹上交差点を直進して伊勢市駅前通りに出て、左折して外宮前鳥居に通じていたという資料はある。又、内宮への御塩道に付いての記述は見当たらないが、内宮への献納は二見から五十鈴川又は五十鈴川沿いに行われたのではないか。



さて、塩屋御園、大塩屋御園で製塩された御塩は黒瀬・新開で櫃に入れられ、船江東古道を経て JR 踏切を渡り右折して外宮へ、踏切手前を左折して清浄坊橋から宇治道を経て現在の「二見街道入口」付近を左折して古市に向かう。

御塩は辛櫃（からひつ）に入れられ人力によって運ばれた。昔の御塩道はたとえ遠い道でも畦道や狭い道を選び運ばれていった。これは、葬儀の列などの不浄（忌：いみ）にあわない為で、わざと死者を入れた棺が通れない細い道を進んだからと言われている。従って上記した道を避けその側道を通ったのかも知れないが私には分からない。

明応 7（1498）年に起きた明応大地震で塩田は壊滅して献塩が二見に移ってから船江東古道の御塩道の役割はなくなった。

3. 北畠親房、船江を走る

北朝の光明天皇を擁立して開いた室町幕府が成立（建武 3 年 1336 年）すると、親房は次男顕信と共に伊勢へ下って、一之瀬、田丸で抵抗の拠点づくりに着手した。

伊勢に下向した親房は、伊勢吹上にあった光明寺（現在は岩淵にある）の恵観という僧侶と親交があり、恵観は自ら船に乗り伊勢湾内の北朝方に対して攪乱攻撃を仕掛け南朝方に協力したという。関東・東北と吉野を結ぶ中継の拠点として吹上一大湊を通して行われた。船江東古道は重要な道路となっていたのではないか。

親房が大湊から陸奥へ下向した際の軍勢の数には諸説があるが、全てが出帆するのに 1 カ月近くを要していることから、300～500 艘余りの大船団であり、この出陣は南朝方にとって乾坤一擲の大勝負であったと言われている。

然し、この時に使用された船は、50 人乗りとしとすれば 6～10 艘となり、大湊の

砂浜で建造されたと想像される。兵員は宮川中流域で集められ訓練を受け、宮川を小舟で大湊へ下ったと思われる。陸路の場合は船江中、西古道が主な道であると考えられるが、私は水路を下ったと推定する。

僅かな事例ではあるが、船江地区は山田北部の沿岸部と中心部と繋ぐ重要な立地をかなえていた。縄文海退時には甘露地集落（私の仮称）が生まれ人の居住が始まっていた。然し、平安朝初期に水没し再陸化するまでその人々の営みは消されてしまった。再陸化が始まると同時に船江北部が海の玄関口として発達して上記した歴史的な事柄を支えて来た。

参考資料 歴史と文化のまちを歩く 飯南教育事務所 文化課
北条義時書状 伊勢国曾弥生を巡って 歴史の情報蔵 三重県県史編纂班
伊勢市の平家むら 間宮忠夫 伊勢郷土会
三重県の歴史 西垣晴次・松島弘 県史シリーズ24 山川出版社
伊勢市史（中世編）伊勢市市史編纂室

あとがき

本稿を書き始めた平成24年11月から既に1年半を経た。この間、心臓発作により2度入院を余儀なくされた。幸いに大事に至らず元気に生活を続けている。又、退職後に立ち上げた「水無月会」と言うお話会も引退するなど色々な変化があった。

今回のテーマで最も苦労したことは殆ど史料に出会わなかったことである。間もなく83歳を迎えようとする私にとって、現地にもっと出向いて調査すべきであるが中々腰が上がらなくなってしまった。

史料に出会わないということは、史実という縛りからはずれて、自由奔放に過去のわが故郷に思いを巡らせて愉しむことが出来た。

本シリーズは平成16(2004)年6月に第1号を上梓(?)してから丁度10年を経た。その全号に義姉 大屋乙女様の援助、激励を頂いたことがここまで学習を続けられたと感謝している。更に次の10号を最終号として頑張りたいと思う。

今回も貴重な助言や史料を惜しみなく提供して頂いた日本考古学協会員 和田英雄氏には深く感謝する。今後ともご指導をお願いしたい。

おわり